

# コーパスに基づいた「触る」の分析

## —他動性との関連から—

秋 元 美 晴

### 1. はじめに

動詞の中には、「先生に頼る」「先生を頼る」や「キーボードに触る」「キーボードを触る」、「政治家の不正に怒る」「政治家の不正を怒る」のように、「に」と「を」を交替できるものがある。「に」か「を」を選ぶ要因はどんなところにあるのだろうか。

ところで、筆者が問題の所在を感じたのは、芥川龍之介の『鼻』の以下の箇所を読んだときであった。

そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさ<sup>u</sup>わってみた。 (下線は筆者)

本稿では BCCWJ2008 モニター版<sup>(1)</sup> のコーパスから集めた用例を利用し、「触る」の実例を収集・分析し、その要因を明らかにしていく。なお、以下の考察では、文法的観点というよりは、「他動性」の観点から分析を試みたものであり、一つの切り口を示そうとするものである。

### 2. 先行研究

「触る」は類義語である「触れる」と比較して論じられることが多い。長嶋(1976)では、この2語の比較から「触る」は、主体と客体の両方が人間(人体)であるか、あるいはそのどちらかが人間(人体)でなければならない

いこと、また、「触れる」が接触という事象を〈物理的・客観的に〉とらえているのに対して、「触る」は〈人間に焦点をあてて〉とらえているとしている。また、森田（1977）は、「さわる」は「AがBにさわる」「BがAにさわる」の2つの立場があり、前者は意志的行為であり、後者は無意識的作用であるが、どちらの場合もAは「人」で、Bは「人」でも「物」でもよいとしている。そして、「さわる」が用いられるのは、「意識的でも、無意識的でもよいが、人間や動物の体表の一部に何かに触る」とき、および人や動物が意識的に何かに触れるときのみだとしている。能動的「さわる」が動きを持った意志的行為であるために、「～にさわる／～をさわる」の自・他動詞両形が行われるとしている。また、「にさわる」は動きは少ないが、「をさわる」は動きが大きく感じられると述べている。『日本語文法大辞典』（2001）では、「さわる」は意識的、意図的な行為で、たいていは手で対象に接すること、また、「ふれる」よりも比較的長時間接している場合で、対象を撫でたり叩いたりする行為を含むとしている。「に」と「を」の交替に関しては、二格の場合は偶然的、一時的な感じがし、ヲ格を使うと意図的、やや長期的な感じがするとしている。

一方、桑井（1978）では、「さわる・ふれる・接する・接触する」の4語を接触動詞のグループとし、比較した結果、「さわる」は原則として自動詞であり、他動詞に用いられた例は1例しかなく、日常語的であるとしている。

格助詞「に」と「を」は、『大辞林 第二版』によれば、「に」は「上代から用いられている語で、動作・作用が行われ、また存在する時間的、空間的な位置や範囲を示すのが本来の用法」とし、15に分類しているが、「～に触る」の「に」は、その④「帰着点や動作の及ぶ方向を表す」に最も近いと考えられる。「を」は、動作・作用の対象を表す「を」である。

### 3. 他動性

「他動性」について、角田他（2007）は「自動詞文・自動詞節との関係を含めて、他動詞文・他動詞節に関する言語現象一般を指す」と定義し、さらに、従来、他動詞文は「目的語がある・動作が主語から目的語に向かう、ま

たは及ぶ」と規定し、自動詞文は「目的語がない・動作が目的語に向かわない」と規定しているが、「他動性」という現象はもっと幅広く、さまざまな側面があり、多様な現象であることが1980年ごろからの研究で明らかになったと述べている。

### 3.1. Hopper & Thompson の他動性についての見解

他動性についての先行研究には Hopper & Thompson (1980) があるが、角田他 (2007) では、その Hopper & Thompson (1980:252) の「他動性」について、次のように説明している。

1. 他動詞文は自動詞文と連続体をなす。
2. 他動性は A～J の10の意味的特徴からなっていて、各意味的特徴は「他動性が高い」「他動性が低い」の程度を示す。

表1 Hopper & Thompson (1980) の他動性の10の意味的特徴(角田他 2007: 4による)

	高い	低い
A. Participants (参加者)	2人以上	1人
B. Kinesis (動作様態, 動き)	動作	非動作
C. Aspect (アスペクト)	動作限界あり	動作限界なし
D. Punctuality (瞬間性)	瞬間	非瞬間
E. Volitionality (意図性, 意志性)	意図的	非意図的
F. Affirmation (肯定)	肯定	否定
G. Mode (現実性)	現実	非現実
H. Agency (動作能力, 動作主性)	高い	低い
I. Affectedness of Object (被動作性, 影響性, 受影性, 対象への影響, 動作が対象に及ぶ度合い)	全体的に影響	部分的に影響
J. Individuation of Object (対象の個別化, 対象の個体化, 個性性)	高い	低い

10の意味的特徴は表1のとおりである。

さらに、「10の意味的特徴のどれかの点で、文(a)が文(b)よりも他動性が高ければ、そしてそれに付随して文法的な、あるいは意味的な違いが文の他の部分に現れるなら、この違いの点でも、文(a)の方が文(b)よりも他動性が高い」という仮説をたてていると説明している。これに対して、角田(2007)では、10の意味的特徴のうちの被動作性に関して、ただ動作の対象に及ぶかどうかだけでなく、対象に変化を起こすかどうかとも重要な点であると反論し、他動詞文の格枠組みの実現には、被動作性が重要であり、意図性は関与しないとしているが、Malchukovは意図性の方が被動作性よりも重要な場合があると主張したとしている。本稿では、この仮説に基づいて「触る」がどのような場合に「に」を選び、どのような場合に「を」を選ぶかをBCCWJモニター版のコーパスから用例を集めて考察していく。

#### 4. 用例の収集

BCCWJモニター版を利用し、ひらがな表記の「さわる」と漢字表記の「触る」のすべての活用形を含む例を集めた。カタカナ表記の「サワル」や旧字体の「觸る」は対象としなかった。また、本稿では、「指、手、足など、体の部分で何かに接する」という意味で使用される「触る」について考察することを目的としているので、「障害となる」の意味の「障る」も対象外とした。「さわる」「触る」の直前に「に」または「を」をとる例のほかに、「白い足の指にひよいと触ったり」のように目的語と動詞の間に他の語が入る場合も含めて例を収集した。このうち、「気にさわる」「しゃくにさわる」「神経にさわる」「カンにさわる」などの慣用的な表現として使われるものや、「制度にさわる」「法律の方をさわる」のように「指、手、足など、体の部分で何かに接する」以外の意味で使用されているもの、また、比喩的表現である「腫れ物にさわるかのよう」もデータに含めなかった<sup>(2)</sup>。その結果、「さわる」「触る」が「に」をとる例文は104例あり、「を」をとる例文は145例あった。

#### 4.1. 「に」「を」の前に来る名詞的目的語

「に」「を」の前にどのような種類の名詞（代名詞）が来るのかを調べ、分類し、上位5位までを降順に示したのが表2と表3である。

「に」の前に来る名詞（代名詞）も「を」の前に来る名詞（代名詞）も、

表2 「に」の前に来る名詞（代名詞）の分類

名詞（代名詞）の種類・語例	種類の数	語数（%）
〈人の体〉体・皮膚・（お）尻	25	33（32%）
〈物〉物・拳銃・パソコン	25	29（27%）
〈人間〉人・私・美奈	18	20（19%）
〈動物〉動物・魚・猫	9	10（10%）
〈こそあど〉それ・あそこ・どこか	4	5（5%）
〈その他〉	6	7（7%）
合 計	87	104（100%）

表3 「を」の前に来る名詞（代名詞）の分類

名詞（代名詞）の種類・語例	種類の数	語数（%）
〈人の体〉体・お腹・胸	39	78（54%）
〈物〉モノ（もの・物）・ピアノ・指輪	28	41（28%）
〈こそあど〉どこ・あそこ・それ	8	12（8%）
〈動物〉動物・猫・尻尾	5	6（4%）
〈空間・場所〉ところ・下・その辺	3	3（2%）
〈その他〉	3	5（3%）
合 計	86	145（100%）

最も頻度が高かったのは〈人の体〉で、次いで〈物〉である。

#### 4.1.1. 「に」の前に来る名詞（代名詞）

「に」の前に来る名詞（代名詞）で目立つのは〈人間〉である。この中には「人」「子ども」「男」などの名詞のほかに「私」「彼」「おれ」などの代名詞や「美奈」「谷口さん」などの固有名詞も含めたが、この例が（1）も含めて20例もあった。

（1）私はそれを阻止するのが楽しくて楽しくて、「あたしの谷さんに触らないでっ」と叫んでは二人で彼を取り合って遊んだりした。（以下、  
下線は筆者）（田口ランディ『スカートの中の秘密の生活』）

（2）「おれにさわるな！」 ほくは叫んだ。  
（栗本薫『終わりのないラブソング』）

これに対して〈人間〉が「を」の前に来る名詞（代名詞）は、（3）の代名詞「あなた」の1例のみだった。

（3）「空」という状態には／（中略）／形もなく声もなく香りもなく／あなたをさわるものもなく／心の対象もありません  
（柳澤桂子『生きて死ぬ智慧』）

#### 4.1.2. 「を」の前に来る名詞（代名詞）

〈人の体〉と〈物〉はどちらにも多く現れ、また、〈物〉の全体に占めるパーセンテージは27%と28%とどちらも変わらない。しかし、〈人の体〉が「を」の前に来る例は78例もあり、全体の54%と半数以上を占めている。

（4）すると母親はまず手足をさわる。そして抱く。  
（水野肇『夫と妻のための老年学』）

(5) 手で顔をさわらないようにする, , , などに気をつけるのもいいと思いますよ。  
(Yahoo! 知恵袋 OC09\_02683)

## 5. 分析

角田 (2007) では, 他動性が最も高い典型的なパターンとその逆の他動性の最も低い典型的なパターンについて次のように述べている。前者は, 「太郎が箱を壊した」のように, 主語が人間で動作性があり, 目的語が個別性のある具体名詞で, 動詞が動的な場合であり, この場合, 日本語では一般的には動作の対象を表す「を」をとることになる。後者は, 「その主張はダーウィンの進化論に似ている」のように, 主語が人間以外で非動作性であり, 目的語が個別性のない抽象名詞で, 動詞が状態動詞の場合であり, この場合は一般的に「に」をとることになる。

以下の議論では, この他動性の観点から「に」をとる場合と「を」をとる場合を考察する。差し当たり, 動詞は「触る」に限るので, 主語と目的語を分析していけばよいことになる。

分析にあたり, 「に」「を」の両方の前に来る名詞 (代名詞) の中で, 共に頻度が高い〈人の体〉〈物〉から例を挙げて考察していく。

### 5.1. 〈人の体〉を目的語とする文

#### 5.1.1. 肩

(6) (7) は「肩」を目的語とする文である。

(6) 腕が伸びてきて, 互の肩に触った。

(宮部みゆき『ブライブ・ストーリー』)

(7) 「Fさん, 左手で右肩を触ってみてください。どうですか?」

(中井吉英『はじめての心療内科』)

(6)は主語が「腕」で、目的語が「亘の肩」であり、(7)は主語が「Fさん」で、目的語が「右肩」である。(7)は人間である「Fさん」が主語であるという点で、(6)より他動性が高くなる。その上、「左手で」とあるように「左手」という道具を用いていることはより他動性が強くなることを意味しており、そのために「を」をとることになる。

### 5.1.2. おなか (お腹)

(8)〈聖母〉と出会ったときにエリザベートが、マリアのおなかにさわって、それがふくらんでいるのを感じて驚嘆するあの仕草。

(鈴木道彦『失われた時を求めて：抄訳版』)

(9)旦那さん(パパ)がお腹を触って胎動を感じられたのはいつ頃でしたか。  
(Yahoo!知恵袋 OC10\_02087)

(8)も(9)も主語が「エリザベート」「旦那さん」と人間であり、目的語も個別性のある具体名詞の「おなか(お腹)」である。先の観点から考えれば、(8)も「に」ではなく「を」をとるべきところであるが、「に」となっている。その理由はこの話の内容によるものだと考えられる。主語のエリザベートはマリアが神の子を宿しているということが信じがたく、恐る恐るマリアのお腹を触るのである。もし、真実だとしたらマリアは〈聖母〉となるわけだからである。そのためにエリザベートの動作性が弱くなり、「に」を選んだと考えられる。

〈人の体〉が目的語となる場合は、主語が人間である場合が比較的多く見られた。したがって、他動性が高くなり、「を」を選ぶ比率が高くなったと考えられよう。それに対して「に」をとる用例には(6)の「腕」のように、人の体の一部を主語にする場合が多く見られた。「腕」は人の体の一部だが、人間が背後に押しやられる分、他動性が低くになると考えられる。

次の(10)と(11)も〈人の体〉を目的語とする文だが、これまで見てきたように「肩」や「お腹」などの体の一部ではなく、体全体を目的語とする



文である。

- (10) お節介にも、救急処置か何かをしようとする者がいたが、横尾はそいつの手を弾き、意味不明に喚き散らし、睨め付け、自分達の身体に触られるのを拒絶した。  
(黒武洋『パンドラの火花』)

- (11) もちろん悪い会社の話ですが、仲間の女性を使って体を触られたと痴漢にしたてあげたり平気でするそうですよ。

(Yahoo! 知恵袋 OC05\_01037)

(10) も (11) も動詞が「触られる」と受身になっている文であり、(10) の「自分達の身体に触られる」の「に」を「を」にすることも、(11) の「仲間の女性を使って体を触られたと痴漢にしたてあげたり」の「を」を「に」にすることも可能である。受身文になっても直接対象である目的語のとり助詞の交替が可能である。それではなぜ (11) では「を」に、(10) では「に」になっているのであろうか。これは意図性によるものだと考えられる。すなわち、(11) においては、相手を痴漢にするためには、相手が意図的に「体を触る」という行為をすることが必要になる。そのために「を」が選ばれたのではないだろうか。一方、(10) は、誰かが横尾たちの体を触るのであるが、その行為は、痴漢のように「体を触る」こと自体に意図があるわけではない。救命のために「体を触る」わけなので、(10) の文では「に」が選ばれたのだと考えられる<sup>(3)</sup>。

次は〈人間〉が目的語となる場合である。先にも述べたように、人間が目的語となる場合には、(1) や (2) のように「に」をとることが圧倒的に多いが、これは、他動性の高い典型的なパターンは目的語が「個別性のある具体名詞」であるのに対して、「谷口さん」や「おれ」は「人間」で「個別性のある具体名詞」とは反対の方向にあるためではないだろうか。

これまで、目的語が体の一部である「肩」、そして「体全体」、最後に「人間」と見てきたが、「を」から「に」へと移っていくことがわかる。「肩」や

「お腹」など具体的な部分から、徐々に具体性を欠いたものへと変化していくにつれ、「を」から「に」に変わっていくのだと考えられる。

## 5.2. 〈物〉を目的語とする文

次に第2位の〈物〉を目的語とする文のペアを見ていく。

### 5.2.1. 拳銃

ここでは、「拳銃」を取り上げて、考えてみよう。

(12) 関谷は無意識に胸の拳銃に触った。 (内田康夫『白鳥殺人事件』)

(13) 少年はポケットの上から拳銃を触ってみた。 (柏枝真郷『転』)

(12)は「無意識に」とあるように、主語の関谷の動作性を弱めているため他動性が低くなり、ここでは「に」が選ばれている<sup>(4)</sup>。これに対して(13)の主語である少年は、拳銃を撃ってしまい、時計台の下の穴に隠れており、パーカーの胸ポケットにしまった重い拳銃を触りながら、引き金を引いたときのことを思い出している。少年の「触る」という行為は意図的であるので、「を」が選ばれているのであろう。

### 5.2.2. パソコン

もう一つ〈物〉を目的語とする文のペアを見ていく。

(14)は、ホームページ作りにパソコン用語の知識が必要か否かという質問に対する回答である。

(14) 自分はパソコンに触ったことも無いときからホームページを作っていますから、出来るとは思いますよ。(Yahoo!知恵袋 OC02\_00309)

(15) 同社はコンピュータ用 OS (基本ソフト) の世界的スタンダードになった「ウィンドウズ95」を出したころから、パソコンを触る人も触

らない人にも、世界中でその名が知られるようになった。

(高橋真人『宣伝費ゼロ時代の新しいPR術』)

(14)は、主語は「自分」という人間であり、目的語である「パソコン」は具体名詞であるが、「に」を選択している。これは、述語が「触ったことも無い」と否定になっているためであろう。否定が他動性を弱める一つのパラメータとなっていることは表1にも示されている。(15)は「パソコンを触る人」と肯定であり、先にあげた他動性の典型的なパターンに合致するために「を」が選ばれているものと考えられる。

ところで、「に」をとる目的語が〈物〉の場合は、全体の27%を占め、「を」をとる目的語が〈物〉の場合は、全体の28%を占め、その比率はほとんど変わらない。その理由は、物を全体としてとらえるか、部分としてとらえるかによって、違ってくると考えられる。すなわち、「他動性の10の意味的特徴」のIの「対象への影響」が、全体的なものか、部分的なものかによるためだと考えられよう。全体的な場合は他動性が高く、「を」をとることになり、部分的な場合は「に」をとることになる。例えば、「ピアノにさわると」「ピアノをさわると」比べると、「ピアノに」はピアノの一部を触ることを意味するが、「ピアノを」だと、「テレビ」や「テーブル」でなくて「ピアノ」そのもの、すなわち「ピアノ」を全体としてとらえていることになる<sup>(5)</sup>。

## 6. おわりに

BCCWJ モニター版のコーパスを利用し、「体の部分で何かに接する」の意味で使われる「触る」が「に」をとる場合と「を」をとる場合の要因を考察した。『国語辞典』の中には「触る」は自動詞とだけしているものも何冊かあったが、収集した例を見ると、「～を触る」の用法のほうがその数が多かった。先述したように Hopper & Thompson (1980) が「他動詞文と自動詞文は峻別できない連続体をなす」(角田他2007: 3) といっているが、本稿では、自動詞・他動詞の区別はせず、他動性という観点から考察し、特に他動性の強さ・弱さに基づいて見たときに「を」は他動性の強いことを示

し、「に」は他動性の弱いことを示すということを多くの用例を分析した結果明らかにした。

ただし、それはさまざまな統語的な要因や文脈、文体にも作用されるので、はっきりと峻別できるものではない。ここでは、その傾向性を述べたにすぎない。

なお、将来の課題としては「に」と「を」の交替を通時的に考察する必要があるだろう<sup>(6)</sup>。

## 注

- (1) BCCWJ2008モニター版とは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ2008年版(2800万語)のことである。国立国語研究所のコーパス整備計画の一環で、新聞・雑誌・書籍などの公共性のある書き言葉を主な資料として、それぞれの資料から書き言葉の実態が過不足なく反映されるようテキストをバランスよく収集し、著作権処理を施し、研究用の情報を付与して2008年7月に公開された。
- (2) 「しゃく(癩)にさわる」は20例、「(お)気にさわる」は18例、「腫れ物にさわるかのよう」は8例、「神経にさわる」は5例、「カンにさわる」は3例、「制度にさわる」「法律の方をさわる」は各1例、合計が56例あった。
- (3) この例文で「に」が使われているのは、主節の述語である「拒絶する」が「を」をとるので、それとの衝突を避けるために「に」をとるということも理由の一つだと考えられる。
- (4) 副詞と「触る」の共起関係により、「に」をとるか「を」をとるかが決定されることがある。以下は「を」と共起している例である。「3日に1度くらいなのですが、何気なくあごを触るとちくっとして、男の人のような(ママ)ひげが1本~2本だけ生えていて、抜くと眉毛くらいの太さがあります。」(Yahoo!知恵袋 OC09\_03822) 副詞がどの程度「に」「を」の選択に関わっているかは更に一層の調査が必要であろう。

- (5) 「ピアノを触る」、あるいは「パソコンを触る」というと、「ピアノを弾くこと」「パソコンを操作すること」という意味が含意されるが、その場合は、ピアノやパソコンの持つ機能から出てくる派生的な意味があることは確かである。このような含意が「を」をとる判断の一つになっている。
- (6) 『日本国語大辞典 第二版』によれば、「手で触れる。軽く接触する。あたる」の意味として使用されている「さわる」の初出として『竹取物語』の「手をささげて探り給ふに、手にひらめる物さはる時に」の例が載っている。次いで『土左日記』(935)の「みなそこの月の上よりこぐ船の棹にさはるは桂なるらし」、日葡辞書(1603~1604)の「ウヲがテニ sawatta (サワッタ)〈訳〉魚が手に触った」、『浄瑠璃・妹背山婦女庭訓』(1771)四「仮初にもびこびことちょっとでもさはるがいな、腰骨踏み折り」、『蓼喰ふ虫』(1928~1929)「忍びやかな丁子のほひと伽羅のかをりに似たものが、彼女の髪の毛と共にかすかな彼の頬にさはった」までの例を見ると、『浄瑠璃・妹背山婦女庭訓』は不明だが、残る「触る」の例はすべて「に」をとっている。「を」をとる例は『受胎』(1947)の「ツンとした何食はぬ顔つきで、いかにも額の汗を拭ふやうな恰好をしたうへでちょっと帽子のふちを触はる」のみである。「補注」には「動詞「さわる(障)」の、支障となる意が軽くなって派生した語と思われる。」とあるが、もし、そうならば、そもそも「触る」は「に」をとるものだったと考えられる。通時的に見た場合、現在に近づくにつれて、他動性が高まっていったと考えられるのではないだろうか。

#### 参考文献

- Hopper, Paul J. & Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56:251-299.
- 桑井和幸 (1978) 「さわる・ふれる・接する・接触する」(『日本語研究1』)  
東京都立大学

- 杉本 武 (1991) 「ニ格をとる自動詞—準他動詞と受動詞—」 (『日本語のヴォイスと他動性』) くろしお出版
- 角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編 (2007) 『他動性の通言語的研究』 くろしお出版
- 長嶋善郎 (1976) 「フレルとサワル」 (『ことばの意味1』) 平凡社
- 日本国語大辞典 第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001) 『日本国語大辞典 第二版 第六巻』 小学館
- 松村明編 (1995) 『大辞林 第二版』 三省堂
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語』 角川書店
- 森田良行 (2006) 『日本語の類語表現辞典』 東京堂出版
- 山口明穂・秋本守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』 明治書院

本稿は2009年3月14日、東京工業大学で開催された、特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップにおいて「「触る」の他動性に関する分析」と題して口頭発表したものに加筆修正したものである。資料の収集に当たっては、国立国語研究所の佐野大樹氏および田中弥生氏にご協力いただき、また、口頭発表に際しては、同研究所の丸山岳彦氏に貴重なご助言を賜った。